

【資料】

「有田文庫」について

長屋政勝*

1. 法政大学日本統計研究所「有田文庫」の成立経緯

本学会々員であった有田正三氏が亡くなったのは2004年1月である。その直後に、滋賀大学経済学部有田ゼミナール出身者で当時は経済統計学会々員であった川田基生氏より、当方に故有田会員（以下、有田と略称）の残された蔵書の処分についての相談があった。しかし、これには有田ゼミ出身の研究者のどなたかが当たるのが筋と思われ、その時は話をお断りした。だが、有田ゼミ出身者の間での調整が不首尾に終わったとのことで、再度の要請があり、結局その仕事を引き受けることになった。また、この仕事では文献資料に詳しい上藤一郎会員の協力を得ることになった。

2004年5月3日(月)、長岡京市天神にある有田宅を訪問し、令弟・有田良雄と甥御・渡辺和樹両氏の立会いの下、有田と昵懇の関係にあった足利末男会員の御同席を願い、川田・上藤・長屋、この4名で蔵書の見聞を行なった。一見して、その分量の多さもさることながら、その内容の豊富さにも圧倒された。ジュースミルヒ『神の秩序』（第4版）、ケトレーの『社会体制論』や『社会物理学』（『人間に就いて』第2版）の稀購本に始まり、マイヤーの『社会生活における合法則性』や『統計学と社会理論』（全3巻）に代表される19-20世紀前半のドイツ社会統計学の大量の原書、またわが国で発刊された戦前・戦後の

統計学書が網羅されており、蔵書を時系列的に整理・要覧すれば統計学の歴史的発展が一望できるほどの内容と数量を擁した蔵書であった。蔵書をどこかの研究機関に一括移管し、その後、研究者の利用に供する形に整理すること、これは後に続くわれわれの義務ではないかと考えられた。こうして移管先探しが始まった。

移管先で真っ先に考えられた処は、有田が生前その整理に尽力された「蜷川統計学文庫」の収まっている京都府立総合資料館（これは蜷川虎三の京都府知事時代に設立されたもの）である。蜷川文庫と並んでその蔵書が開架されることは、有田の最も喜ばれることと考えられたからである。しかし、資料館の方からは、2001年に地場関連の資料収集に方向転換した後なので、そういった学術文献の収納は不可能という返事が返ってきた。次に、近隣圏の大学に当たってみたが、分量の圧倒さとドイツ語文献の多いことに尻込みされ、不成功に終わった。そこで、ここは一番、やはり正攻法で行くしかないと考え、法政大学の日本統計研究所にお願いしてみようということになった。ここには故上杉正一郎会員の蔵書が収められており、また隣接の大原社会問題研究所には高野岩三郎文庫もあり、そうした伝統にあって有田蔵書の意義を最も良く理解してくれる処と判断したからである。

6月末に法政大学の伊藤陽一会員に資料を送り趣旨を説明し、蔵書引き取りの可能性についての検討をお願いした。この依頼を前向きに受け取っていただき、7月下旬に、伊藤会員より財務担当理事の諒解を取りつけるこ

* 京都大学名誉教授

〒610-1103 京都市西京区御陵峰ヶ堂町1丁目12-4



有田文庫書架 (洋書 1945年以前)



有田文庫書架 (部分)

とができ、有田蔵書引き受け諒との連絡があった。これでようやく有田蔵書の落ち着き先が決まった。結果的には、有田蔵書の所蔵場所として、他にない適所を得たというべきであろう。

約1ヶ月後の8月22日(日)、ダンボール詰作業を行ない、和書約2,500冊、洋書約1,500冊の計約4,000冊を約200箱に詰め込み、翌日、日本統計研究所に向けて発送し、24日(火)午後、無事到着した。その後、ダンボールが開けられ、法政大学・多摩図書館地下3階にある日本統計研究所や大原社会問題研究所の文献資料の取まっている場所の一割を取って、そこの電動式の大規模書架に順次並べられてゆくようになる。そして、女性職員の尽力でその整理作業が続けられることになった。各冊ごとに「有田文庫」の判が押され、整理済み分は有田文庫目録に入力され登録されてゆく。現時点では、和・洋書共々の戦前分はほぼ全部、戦後分は一部が整理終了という状況である。これら整理済み分はすべて、有田文庫本としてコンピュータ入力され、日本統計研究所のホームページを開けば、それを一覧できる形になっている。

有田蔵書の最大特徴は統計学関係の洋書が豊富なことにある。それは大きく、1)1870年以前の古典、2)ドイツ社会統計学、3)フランクフルト学派統計学、4)ドイツ圏での

確率論と数理統計学、5)英米派数理統計学・確率論、6)その他、に分類できよう。その一端を示すべく、19世紀末までに刊行されたものの中から、めぼしい書名を挙げてみると以下ようになる。

- J.P. Süßmilch, Die göttliche Ordnung in den Veränderungen des Menschlichen Geschlechts, aus der Geburt, dem Tode und der Fortpflanzung desselben erwiesen, 3 Bde, 4. Aufl, 1775.
- J. Zizius, Theoretische Vorbereitung und Einleitung zur Statistik, 1810.
- A. Quetelet, Ueber den Menschen und die Entwicklung seiner Fähigkeit, oder Versuch einer Physik der Gesellschaft, 1838. (『人間に就いて』1835年、のリーケによる独訳)
- A. Quetelet, Du système social et des lois qui le régissent, 1848.
- A. Quetelet, Physique sociale ou essai sur le développement des facultés de l'homme, 2 tome, 1869. (および、その独訳 Soziale Physik, 2 Bde, 1914/1921も所在)
- J.G. Hoffman, Sammlung kleiner Schriften : statistisch-wissenschaftlichen Inhalts, 1843.
- C. Knies, Die Statistik als selbständige Wissenschaft, 1850.
- L. Stein, System der Statistik, der Populationis-

- tik und der Volkswirtschaftslehre, 1852.
- E.A. Jonák, Theorie der Statistik in Grundzügen, 1856.
- J.E. Wappäus, Allgemeine Bevölkerungsstatistik, 2 Bde, 1859.
- C.W. Dieterici, Handbuch der Statistik des preussischen Staats, 1861.
- E. Engel, Internationale Statistische Congress in Berlin, 1863.
- M.W. Drobisch, Neue Darstellung der Logik nach ihren einfachsten Verhältnissen, 1863.
- M.W. Drobisch, Moralische Statistik und die Menschliche Willensfreiheit, 1867.
- G.F. Knapp, Ueber die Ermittlung der Sterblichkeit aus den Aufzeichnungen der Bevölkerungsstatistik, 1868.
- G. Zeuner, Abhandlungen aus mathematischen Statistik, 1869.
- M. Haushofer, Lehr- und Handbuch der Statistik, 1872.
- G.F. Knapp, Theorie des Bevölkerungs-Wechsels, 1874.
- G. Rümelin, Reden und Aufsätze, 3 Folge, 1875-1894.
- W. Lexis, Einleitung in die Theorie der Bevölkerungsstatistik, 1875.
- G.v. Mayr, Die Gesetzmässigkeit im Gesellschaftleben, 1877.
- G.v. Mayr, Statistik und Gesellschaftslehre, Bd. 1, Theoretische Statistik, 1895, 2. Aufl., 1914.
- G.v. Mayr, Statistik und Gesellschaftslehre, Bd. 2, Bevölkerungsstatistik, 1897, 2. Aufl., 1926.
- E. Morpurgo, Die Statistik und die Socialwissenschaft, 1877. (伊語からの独訳)
- M.F. Le Play, La réform sociale en France, 4 tome, 1878.
- M. Block, Handbuch der Statistik, Deut. Ausg., 1879.
- J.E. Wappäus, Einleitung in das Studium der Statistik, 1881.
- A.v. Oettingen, Die Moralstatistik in ihrer Bedeutung für eine Socialethik, 3. Aufl., 1882.
- V. John, Geschichte der Statistik, 1884.
- K. Bücher, Die Bevölkerung von Frankfurt am Main im 14. und 15. Jahrhundert, 1886.
- A. Meitzen, Geschichte, Theorie und Technik der Statistik, 1886, 2. Aufl., 1903. (英訳も所在)
- J. Venn, The Logic of Chance, 1888.
- E. Mischler, Allgemeine Grundlagen der Verwaltungsstatistik, 1892.
- N. Reichesberg, Die Statistik und die Gesellschaftswissenschaft, 1893.
- Geschichte und Einrichtung amtlichen Statistik im Königreich Bayern, 1895.
- G.T. Fechner, Kollektivmasslehre, 1897.
- T. Kistiakowski, Gesellschaft und Einzelwesen, 1899.

以上が「有田文庫」が法政大学日本統計研究所に設立されることになった経緯である。会員諸氏において、多摩キャンパスを訪れた際には、是非一度、森博美会員にお願いして有田文庫を実際に見聞する機会をもっていただけだと思っているところである。

2. 蜷川虎三・内海庫一郎・有田正三

有田はその名著『社会統計学研究—ドイツ社会統計学分析—』(1963年)にみられるように、わが国の統計学に伝統的なドイツ社会統計学に関する研究を継承し、それを独自の角度から深化・発展させた論者であった。有田文庫の意義を理解する上で、有田がいかなる角度からこのドイツ社会統計学の研鑽を積んできたのか、この点について若干の説明が要ると思われる。その前に、有田自身がどのような経歴を辿って統計学研究に行き着いたのかをみてもみる必要がある(これについては足利会員による『統計学』第86号にある履歴紹介を参照のこと)。その際、有田の研究

を最も深く理解していたと思われる故内海庫一郎会員（以下、内海と略称）との関係にも触れなくてはならない。

有田は1914(大3)年11月15日の生まれ。京都府立二中、第六高等学校文科甲類を経て、1934(昭9)年、京都大学経済学部入学。35-36(昭10-11)年に渡り蜷川ゼミナールに参加する。37(昭12)年、京大卒業。ひき続き大学院にて蜷川の下で経済統計論の研究に従事。当時の蜷川研究室には前田勇太郎・岡部利良・高岡周夫・馬場吉行・岡本愛治・尾上忠雄・内海庫一郎らの統計学と会計学の研究を志す者が多く参集していた。

1940(昭15)年、助手就任。これは、恐らく前年の蜷川の教授昇任と共に実現したことであったろう。同年にはいち早く故大橋隆憲会員も助手に採用されている。「暗い谷間」といわれるこの時期、論理学派統計学や後期社会統計学を軸にしたドイツ統計学史研究に沈潜していたと思われる。45(昭20)年、経済学部講師を嘱託される。蜷川の後継者に目されていたと察せられる。

1946(昭21)年、敗戦を契機にした蜷川学部長の発議の下での経済学部教官の総退陣があり、辞表提出。同年9月、静田均新学部長の下での学部再建案には同意できずとして辞表撤回要請に応ぜず、後に白杉庄一郎・杉原四郎・河野稔らと共に京都大学を解嘱となる。その後、いくつかの学校（大阪外事専門学校、同志社大学、成安女子専門学校）の非常勤講師を務める。

1947(昭22)年、彦根経済専門学校教授に就任。しかし、肺結核に陥り長い闘病生活に入る。49(昭24)年、滋賀大学経済学部助教授。だが、病気のため校務に就くことはできなかったようである。52(昭27)年、病氣治癒、教壇に復帰する。53(昭28)年、中断されていたドイツ社会統計学の研究を再開。この頃、関西の同学者と共に蜷川統計学を継承・発展させる目的の下で統計学研究会の発足に尽力

する。これが後の「経済統計研究会」、さらに今日の「経済統計学会」関西支部の礎となるものとされる。

1959(昭34)年、滋賀大学教授。63(昭38)年、京大より経済学博士を授く。その後、滋賀大学評議員や経済学部長を務める。71(昭46)年、学術会議会員（第3部、経済学）候補となるも落選する。80(昭55)年、滋賀大学定年退官、名誉教授。

1981(昭56)年、神戸女子大学教授（85年まで）。83(昭58)年、大阪経済法科大学客員教授（95年まで）。87(昭62)年、叙勲（勲三等旭日中授章）。2004(平16)年1月28日(水)午後7時5分、胆管癌のため自宅近くの済生会京都府病院にて死去、享年89歳。正四位を贈らる。4月10日(土)、同窓会・有田会の主催で「お別れの会」が長岡京市の市民ホールで開催される。

以上が有田の京大入学後の略歴であるが、その中で蜷川虎三を挟んだ内海・有田、この3者の関係に注目しなければならない。ゼミナール時代とさらに卒業後の数年間に渡り内海と有田は共に蜷川の指導を受けている。有田は1912(明45)年生まれの内海より2歳下で、ゼミでは1期後輩であるが、先輩後輩の壁がなく実に親密な関係にあった。当時（1932-39年頃まで）は、蜷川にとっては冷飯を喰わせられていた不遇時期であり、学位論文が棚上げされたままなかなか通らず、万年助教授と揶揄され、またマルクス経済学に依拠する少数派として孤立していたとされる。助教授のために助手をもつこともできなかった。内海は無給副手、有田は大学院生として経済的精神的に苦しい中を共に机を並べて過ごしたという。蜷川を取りまく状況が最も厳しかったこうした時期に、一緒に勉強したという強い共感があり、それが両人のその後の深い親交の母胎になっていたと思われる。蜷川の指示で、内海は経済指数論、有田の方は後期ドイツ社会統計学の統計方法論を研究テー

マにしたと聞く。

1938(昭13)年、不本意ながらも蜷川の命で内海は満州建国大学に赴任することになり、京都から新京へ渡る。その折、「内海を知っている者が10人いると、7人まで内海を悪くいう。ところが3人が内海をかばうのだ。今後も7対3でやれ」とは有田の歓送辞であり、それがその後の強い支えになったという。これは内海自身の『波乱の昭和私史』に記されているところである。

内海は有田のその実に正確無比なドイツ社会統計学研究に一貫して尊敬の念をもっていた。「蜷川統計学の正統的後継者」とは有田に対する内海の評価である。有田の上述著作に高い評価を与えた内海の書評「後期社会統計学への通路—有田正三『社会統計学研究』をめぐって—」(『統計学』第13号)は、そのような有田の研究への敬意の表われでもある。他方で、有田は内海の行動力や実践活動の経験、社会・歴史問題に関する博識、そしてマルクス主義に対する造詣の深さ、こうしたものに「すごいひと」との憧憬を抱いていたようである。二人は互いにそれぞれ自分がないものを認め合い、その個性と実績を尊重し合っていた。二人はまさに肝胆相照らす仲といえた。上記の内海の長文の書評に対して、有田の方は「私はいまもこの書評を先輩が私のために建ててくれた記念碑として感謝している」と応えている。戦後もかなりして、内海は病気の癒えた有田を自身の勤務していた北大に来ないかと熱心に勧めたとの由。しかし、事情がありそれは実現しなかったという。これが実現していれば、実にユニークなコンビが札幌に出現していたと思われるのだが、いかがであろうか。関西に来た折りなど、内海は有田宅を再三訪問し、情報を交換し親交を暖めていた。

兩人とも蜷川に深く傾倒していた。もっとも、内海の方は理論と言動の両面から蜷川批判を公けにすることで、その想入れをいささ

かカモフラージュしていたようではある。蜷川へのその気持ちはいく分屈折していたように感じられたが、晩年には産業統計研究社内に「蜷川統計学研究所」を設けるなどして、やはり蜷川からの学恩を終生意識していたと思われる。他方、有田の場合には、蜷川に対する敬愛がストレートに出ていたようにみうけられる。それは雑誌『経済』(1979年1月号)誌上での蜷川との対話時の有田の生々とした語り口、『経済』(1981年6月号)への追悼論文「蜷川先生と統計学」の寄稿、また細野武男・吉村康著『蜷川虎三の生涯』(三省堂、1982年)刊行での助力、京都府立総合資料館での「蜷川統計学文庫」整理作業と『蜷川統計学文庫目録』公刊、さらに「蜷川虎三先生著作目録」(宮内幸子編)作成での協力、こうした中に垣間みることができる。ある時、阪急電車で有田に偶会したことがあるが、上記の文庫目録作成作業の帰途中とかで、その仕事を楽しそうに語っていた。また、著作目録の件では、京大医学部内科教室発刊の雑誌に載った蜷川論文の探索依頼があり、それを探し出しそのコピーを送ったところ、非常に喜ばれたこともある。そのような異質な雑誌に蜷川論文があったとは有田にとっても驚きであったようだ。

3. ドイツ社会統計学と有田理論

わが国への統計学の導入は幕末から明治期前半の近代化と西欧思想吸収の一環として行なわれている。1870年代後半から杉亨二や呉文聡らによってドイツの社会統計が紹介され始める。その後、明治期後半のアカデミー制度の確立と共に、わが国におけるドイツ社会統計学の積極的摂取が開始する。明治末期にはアカデミーでの統計学講座を任された者たち(高野岩三郎や財部静治など)がドイツに留学し、ミュンヘン大学のマイヤーの下で直接に社会統計学を修得して帰国している。明治政府による国家体制整備作業において、

そのイデオロギーおよび社会理論としてドイツ国家科学と社会統計学が必要とされたからに他ならない。

高野や財部を第1期とすれば、それに続く岡崎文規、蜷川虎三、有沢広巳、郡菊之助、杉栄らは第2期の統計学者層といるが、それらもやはりドイツ社会統計学に拠るべき理論的基礎を求めている。そうした中であって、理論的に傑出していたのが蜷川であった。1930年代中頃までに提示された蜷川統計理論は、官庁統計業務を追認してその行程をただ整理記述する、あるいはドイツの統計理論を概括するだけに終らない。必ずしも明確な方法論的基準をもたないまま積み重ねられてきた内外の統計作成・利用に関する理論的研究の中から、社会統計の対象とその研究方法の特質究明に当たり、統計利用者という観点から、統計調査と統計解析を構成する要因を析出し、それらの意味と関連を対象認識の方法過程の中で理論化する。それは、統計業務・研究とそれが対象にする社会的集団(=大量)に関する認識の展開を理論的抽象にかけることであり、結果として統計学をして社会科学的方法論とすることである。ドイツ社会統計学にあってはまだマイヤー理論が影響力を残していた1920-30年代に、かかる統計学=社会科学方法論説を提示したところに蜷川理論の特徴がある。

19世紀末に、社会現象全体に関する精密社会理論として確立したドイツ社会統計学であるが、こうした社会統計学(=実質社会理論としての統計学、実体科学としての統計学)は第一次世界大戦後にはかつての権威を少しずつ喪失してゆく。個別社会科学での実証研究の展開は総合的社会理論としての統計学の独走をいつまでも許してはおかない。統計学のレゾンデートルを求めてドイツ社会統計学は新たな方向を模索する。ここから、後にフランクフルト学派とよばれる学派が形成される。その派は台頭してきた数理統計学と距離

をおき、それをストカスティックとして批判しつつも、その手法を部分的に摂取しながら、社会科学的に意味のある統計獲得・利用のあり方=方法論を探求する。フラスケンパーがその代表的論者である。統計学を社会科学的観点に立った研究方法論と規定する点で蜷川理論とフラスケンパー理論には類似性があり、また蜷川にはフラスケンパーの集団論に関する論稿もある。しかし、その拠って立つ基盤には、前者には唯物論的反映論、後者には新カント派の認識論という大きな違いがある。蜷川自身がマイヤー段階の統計学が権威を喪失してゆくこの過程をどの程度意識し、新たな動向をどのように感じ取っていたかは不明である。しかし、そうした中で、蜷川は内海に対して「ハーバラーとフラスケンパーの指数論」、また有田には、「ドイツ社会統計学におけるジージェックの地位」を研究テーマに与えたという。

この有田の研究は、マイヤーの統計理論をドイツ社会統計学の前期段階を代表する理論としてとり挙げ、その実体科学としての統計学が第一次世界大戦後にいかにして形式科学としての統計学(=方法科学としての統計学)へ転換せざるをえなかったか、その歴史的、またとくに理論的必然性を解明しようとしたものである。この転換を媒介する理論としてとり挙げられたのがジージェックの統計理論であった。また、転換後の統計学=形式科学説の理論的完成形態をフラスケンパーの理論にみている。この両者の統計理論に特徴的な認識構造と方法論理を解明し、社会統計学の実体科学説から形式科学説への転換を究明しようとしたのが有田理論である。

有田の研究の特色は、課題としての上記の理論分析に際して、それら理論の特質を方法論理と認識論の次元にまで遡って徹底解明しようとした点にあらう。さらに注目したい点は、ジージェック研究と併行して、有田はドイツ社会統計学の正統派には属さない理論系

統を追求していることである。それらは現象学的観点に依拠して統計作成・利用に現われる諸概念・手法の総体に関する形式論理的整理を試みたティッシャー理論、また統計的認識の方法論理の究明に当たリューメルン・ジグワルト・ヴントらの論理学派あるいは認識論派とよばれた理論、さらに新カント派認識論に立って統計的認識の究明や批判を提示したチュプロフ・ヴァッサーマン・キステアコフスキー・ヴォルフらの理論である。実質科学説ではなく、形式科学説ないしは方法科学説を提示する論者の見解にいち早く注目し、それらの検討を通じて社会統計的認識の独自性をどこに求めるべきかを模索している。これら論者の主張にも注目しつつ、第一次世界大戦後に現われた統計学の転換過程の必然性を、ジー・ジェックとフラスケンパーの理論にみられた概念構成と方法行程を分析することで解明しようするのである。

有田はまずジー・ジェック理論について、それが実体科学説の残滓（統計結果学）を含みながらも、内実は一般的統計方法論の構成を軸にした形式科学の構築を志向したものであったとみる。集団論・調査論・比較論（利用論）・大数法論、等々を論題にした統計方法の論理的特質の解明を通じて、統計調査と統計利用の構成と行程を成立させる契機（理論的結節点としての基本概念）が析出され関連づけられる。統計方法は統計数獲得を目標にし、統計数への各方面（科学、立法・行政、経営）からの要請に臨機適確に対応できる合理的で整合的な手続操作＝技術＝機械的装置として描き出される。しかし、その理論にあっては、結局は「機械学」としての統計調査論であり統計比較論であり、社会科学の方法論としては有効な成果を保証するものではなかった。その原因は、ジー・ジェックの採る認識論的立場が、方法を対象から汲み上げるのではなく、統計方法を認識的要請（＝外延的完全性の網羅）からする目標に服従せしめ、この

目標達成に機能的に順応する手続・操作として捉えたことにあったとする。これは客体（対象）に対する「方法の優位」という転倒した視角からの結果であり、また客体の内容的契機から遊離した形での方法の機能的操作化と機械的手続化であり、つまりは「方法の萎縮」であったと批判する。併せて、ジー・ジェックの下では統計的集団を分解した先に大数法則の働く同質的集団の成立があるとされ、これが統計数の獲得・解釈に際してのひとつの方法基準ともなっていた。この意味で確率論にもとづく数理統計学＝ストカスティークとも融合的な統計方法論であったとされる。

次に、実体的側面を払拭し形式科学化を完遂したとされるフラスケンパー理論がとり挙げられ、そこに内在する独特の認識論的枠組みが究明されている。フラスケンパーの下で、社会現象を意味連関の中で把握（＝記述）するべく、そのための一方法として統計方法（調査論と利用論）が構想された。その方法論構成の基本的原理として「認識目標の二元論」、および「事論理と数論理の平行論」が掲げられている。前者は新カント派認識論に拠って、社会現象における法則的認識を越えた記述的認識の優位性を唱えるものであり、後者は数量化には対象の実体的状態に関する論理的意味づけ（実体概念化）が併行しなければならないことを要請するものである。これらはともにストカスティークとは別次元の社会科学的領域で有効な統計的認識を志向した統計方法論構築を保証するはずであった。しかし、フラスケンパーは数理を統計的認識の本性ととし、調査論では計数・計測を前提にした統計的集団の機能概念化（＝認識内在化）が顕著であり、またその利用論を支えるものは数理的方法の広範な受容であった。本来、社会統計学では確率論は極めて限られた領域でしか有効性をもちえない。しかし、数理的方法から確率論的性格を払拭させ、事論理の

裏づけを経た後、一連の解析手法（代表値・比率，また相関・時系列など）に集団現象に関する記述の機能をもたせることが可能とする。ジージェック段階の統計比較を越えて，そこには確率論的図式から解放された一連の数理統計方法の受容＝撰取を内容とする統計利用論が構想されている。数理を主体とする調査論，数理的方法の可能な限りでの利用を容れた利用論，これをもって社会統計方法論を構成しようとするのがフラスケンパー理論であった。

以上を通じて，後期ドイツ社会統計学が冷徹な論理的分析にかけられ，この学派の統計的認識の理論構造が解剖され，内在する理論的弱点が抽出されている。有田によれば，本来，社会統計は社会構成体（対象としての客体＝資本主義経済体制）の量的把握を目指すべきである。しかし，それは質的構造的認識との有機的関連においてなされるべきものであり，量的把握様式が外から与えられたり，それだけで自立することがあってはならない。ところが，ドイツ社会統計学は，とくにその後期段階に入って，この客体認識を社会構成体の一側面たる類（＝社会的集団）の把握，さらに類から抽象された人為的構成物＝統計的集団の量的認識に制約してしまった。それは社会構成体にある統計方法に調和する部分だけから統計的集団を構成することであり（逆に調和しない要素を取り残すことでもある），統計方法を類の数量獲得という目標に従属する単なる手続様式として捉えることでもある。しかもその目標自体が客体のどのような実質的契機と結びついたものかの検討を等閑視した。対象から方法を組み立てる姿勢はなく，統計調査・利用という方法を外的に設定し，その枠内でしか対象をくみ上げえなかった。対象たる社会構成体の質量両面からする構造的把握との関係を希薄にし，同種個別事例の併存たる統計的集団の量認識だけに関わる方法が一人歩きをした結果，社会科学

的認識と統計的認識の間隙は埋められるどころか逆に広まり，従い，有田のいう「社会統計的認識における客体（社会構成体）と方法（統計方法）の矛盾」も止揚されることはついになかった。要するに，後期ドイツ社会統計学は社会構成体の数量的認識という本来の方向から外れ，その一契機にすぎない類の量的把握（計数・計量，その結果の類的分類，そして計算）として自己完結化の途を歩み，その枠の中では理論的完成度を高めながらも，実はこのことは逆に，社会科学的統計学としては退歩の方向を歩むものでしかなかった。すでにリューメリン・マイヤー段階の統計学にこの間隙がみられたが，とくに後期ドイツ社会統計学においてそれが拡大する。それは社会構成体の総体的構造的把握における量的側面からの接近という方向からみて理論的後退でしかない。統計的認識を社会科学的認識にとっての不可欠の一契機として基礎づける，こうした本来の課題は解決されないままに残された。ドイツ社会統計学は社会的構成体の客観的必然的認識を量的側面から支えること，その中に「真の意味」における統計方法論構築を志向させるべきではあったが，しかし現実にはこの方向からは逸脱し，結果的には不可知論的様相を帯びることになった。この矛盾した過程の追及が有田の一貫した研究モチーフであった。

フランクフルト学派も昨今のドイツ統計学の流れの中で，以前のような個性を発揮できていないようである。プリントは確率論的図式に拠らない統計的推論を模索し，また1970年代にはグローマンがポパーの反証主義に依拠した利用論を組み入れた統計方法論の構築を試みてはいる。しかしながら，これらが先の課題の真の解決に通じるものかどうか。疑問とされるところである。有田はそのような事態をどのように評価していたのだろうか。

最後に，有田が晩年に志していたのは統計

法則論の研究であったと推察される。すなわち、有田は内海追悼文の中で、「ドイツ社会統計学における統計法則論の展開」こそが最後に取り組まなければならない課題であるとし、かつて蜷川にその研究を申し出たところ、「泥沼に入るぞ」といわれ躊躇せざるをえなかったが、いまやその宿題を果たす時期がきた、このように書き残している。内海によれば、蜷川自身も1934(昭9)年頃(『統計学概論』が公刊された時期)にはゼミ生に対して、これから統計的法則論に本格的に取り組むとの意気込みを表明していたという。有田もこのことを意識していたのであろうか。確かに、有田にはエンゲル法則についての論稿もあり、また残された資料には統計法則論に関する論文のコピーが多く含まれている。どのような角度から統計法則論を開拓しようとしていたのであろうか。これもまた有田に聴いてみたかったことである。

とまれ、有田の研究はわれわれにとっては継承すべき貴重な遺業であり、かつまたその主著がドイツ語に翻訳・公刊されていたならば、かかる研究が日本でなされていたことに、かれらドイツの研究者は驚愕したことに違いない。1987年9月17日、グローマンが国際統計協会・東京大会で来日し、その機会を利用して京都大学経済学部で「フランクフルト学派統計学の展開と目標」に関する講演会が開かれた。その折、出席した有田はその主著をグローマンに直接渡している(また、共訳

書『フランクフルト学派の統計学』も足利会員からプリントに渡され、それに対する有田宛札状が有田文庫に残されている)。しかし、その後、有田著作のエッセンスが彼地の研究者に理解されたかどうか、残念ながらこれはいまだ果たされてはいないようである。

さらになお遺憾に思われることは、有田と経済統計学会のわれわれ後学連との接触が決して多くはなかったことである。関西支部例会や総会に出席されることは数少なく、直接に話を聴く機会は数えるほどしかなかった。だが、著作と論文等を通じて窺いえたその学識の広さと深さはわれわれにとっては憧憬的であった。実は、有田から一度話を伺おうということで、わたしどもの「統計史研究会」(1999年2月)へ招待したこともあった。しかし、前日に「昭友会」(蜷川ゼミの同窓会)があり、連日の出歩きは無理ということで、それは実現せずに終ってしまった。その時などをきっかけにして、後学者との接触が深まり、貴重なアドバイスを受ける場があったならば、社会統計学研究の動向もいまとはいささか異なった様相を呈していたのではないだろうか。なにせ、ドイツ社会統計学と蜷川統計学の本質を最も深く理解したひとりなのだから。これはいまもって残念なことではある。(本文中の有田文庫の写真撮影については伊藤陽一会員のお手数を煩わせました。記して感謝します)。